

院御登山ノ時、少納言入道信西御伴ニ候ケリ、前唐院ノ重寶衆徒存知ナカリケレ共、信西才覺吐  
 ナドシタリケリ、其次ニ、明雲僧正我ニイカナル相カ有ト御尋アリ、信西三千ノ貫首、一天ノ明匠  
 ニ御座ス上ハ、子細不及申ト答、重タル仰ニ、我ニ兵定ノ相アリヤト尋給ケレバ、世俗ノ家ヲ出テ、  
 慈悲ノ室ニ入御坐ス、災天何ノ恐カ有ベキナレ共、兵定ノ相アリヤノ御詞怪ク侍テ、是即兵死ノ  
 御相ナラント申タリケルガ、ハタシテ角成給ヒケルコソ哀ナレ、或陰陽師ノ申ケルハ、一山ノ貫  
 長、顯密ノ法燈ニ御座ス上ハ、僧家ノ棟梁イミジケレ共、御名コソ誤付セ給ヒタリケレバ、日月ノ  
 文字ヲ並ベテ、下ニ雲ヲ覆ヘリ、日月ハ明ニ照スベキヲ、雲ニサヘラル、難アリ、カ、レバコノ災  
 ニモアヒ給フニヤ、

〔玉海〕元暦元年二月廿五日甲申、召範源阿闍梨山法師相者、令見大將通、良中將良等、各申有、高運相之

由、官福共富、壽命又長遠也云々、

〔徒然草〕下、明雲座主、相者にあひ給ひて、をのれもし、兵仗の難や有と尋給ひければ、相人まことに  
 其相おはしますと申、いかなる相ぞと尋給ひければ、傷害のおそれおはしますまじき御身にて、  
 かりにもかくおぼしよりて、たづね給ふ、是すでに其あやふみのきざしなりと申けり、はたして  
 矢にあたりて、うせ給ひにけり、

〔徒然草〕下、御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を落馬の相ある人なり、能々つ、しみ給へといひ  
 けるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬よりおちて死に、けり、道に長じぬる一言、神の  
 ごとしと人思へり、さていかなる相ぞと、人のとひければ、きはめて桃じりにして、沛艾の馬をこ  
 のみしかば、此相をおほせ侍りき、いつかは申あやまりたるとぞいひける、

〔翰林胡蘆集〕一、散說略、中

初月潭赤松則村、微時、與寶覺禪師邂逅途中、禪師好相人、見月潭狀貌、謂之曰、必貴、月潭乃謝而曰、誠如